

ワークショップを活用した 学生プロジェクトのコミュニケーション支援

○玉有 朋子¹⁾ 森口 茉梨¹⁾ 有廣 悠乃²⁾ 北岡 和義¹⁾ 寺田 賢治¹⁾

1) 徳島大学 高等教育研究センター

2) 徳島大学 研究支援・産官学連携センター

1. はじめに

徳島大学 高等教育研究センター 学修支援部門 創新教育推進班では、社会の様々な課題を解決できるイノベーション人材を育成することを目的として、イノベーション教育に関する資源を集約した「イノベーションプラザ」を平成31年度に設置した。この組織により、デザイン思考によるアイデア創出から自主的プロジェクト活動を通して社会実装までの一貫した実践的イノベーション教育を行っている。この発表では、令和4年度より創新教育推進班で実施した、活動の活性化を目指しコミュニケーション支援のワークショップについて報告する。

2. アフターコロナの学生プロジェクトの状況

令和2年初頭から始まった新型コロナウイルスの流行により、徳島大学でも令和2年から対面活動が大きく制限された。これにより、イノベーションプラザで進められていた「イノベーション創成担当」による学生プロジェクト活動にも停滞がみられた。

学生プロジェクトとは、学生が自らプロジェクトを立ち上げ、企画・立案・計画・実行・報告を行うものである。これは授業として「イノベーションプロジェクト入門」・「イノベーションプロジェクト実践」を開講しており、イノベーション教育に関連する授業科目として、1年目は「入門」を受講し、2年目は「実践」を受講する。3年目以降は履修なしでの活動継続になる。

活動の停滞状態を把握するために、令和4年5月、学生プロジェクトの参加学生へのヒアリングを行った結果、共通する課題として、コミュニケ

ーション不足、作業スペースが使用できない、集まりが悪く、人数不足、活動に対する受け身の学生の増加などが挙げられた。特に令和4年度には、1年生から3年生全員が入学当初よりコロナ禍で活動が大幅に制限されており、コロナ禍以降のプロジェクト運営しか知らない学生が92%を占め、コミュニケーションに不安があることが推測された。

このヒアリング結果から、活動の停滞原因の主な理由がコミュニケーション不足であることが推察された。そこで、各プロジェクトに対し、コミュニケーション支援のためのワークショップを提供することとなった。

3. コミュニケーション支援ワークショップ

コミュニケーション不足を補うとともに、学生の能動的なプロジェクト活動を促進するために、ワークショップを実施した。

このワークショップは、プロジェクトに参加する学部、学科、学年の異なる学生同士が、コロナ禍でのプロジェクト運営という最適解のない問題を解決し、学生の主体性を高めることを目指して行った。ワークショップのゴールは、プロジェクトの未来のあるべき姿と、それを実現するためのアクションについて考え、共有することである。

2022年6月から翌年3月にかけて6つのプロジェクトに対して行った。詳細を表1に、具体的なワークショップの様子を図1、図2に示す。

4. アンケート結果

このワークショップの効果を検証するために、参加者に対しアンケート調査を行った。なお、ワ

ークショップにはOBも参加していたため、彼らを除外し、活動している現役学生104名の回答を集計した。

表1 ワークショップ全体の満足度

満足度	1年生	%	2年生	%	3年生	%	4年生	%	全体	%
1 (不満がある)	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	14.3	1	1.0
2 ↑	1	1.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.0
3 ↓	2	3.8	1	3.4	1	6.7	0	0.0	4	3.8
4 ↓	14	26.4	13	44.8	3	20.0	3	42.9	33	31.7
5 (満足している)	36	67.9	15	51.7	11	73.3	3	42.9	65	62.5
合計	53	100.0	29	100.0	15	100.0	7	100.0	104	100

出典：玉有 (2023) p. 67

表2 ワークショップを通じたプロジェクト活動に対する意識変化

意識の変化	1年	%	2年	%	3年	%	4年	%	全体	%
1 (変わらなかった)	2	3.8	2	6.9	0	0.0	0	0.0	4	3.8
2 ↑	0	0.0	1	3.4	0	0.0	1	14.3	2	1.9
3 ↓	7	13.2	4	13.8	2	13.3	1	14.3	14	13.5
4 ↓	19	35.8	11	37.9	6	40.0	2	28.6	38	36.5
5 (変わった)	25	47.2	11	37.9	7	46.7	3	42.9	46	44.2
合計	53	100	29	100	15	100	7	100	104	100

出典：玉有 (2023) p. 67

「意識の変化」の具体的な傾向

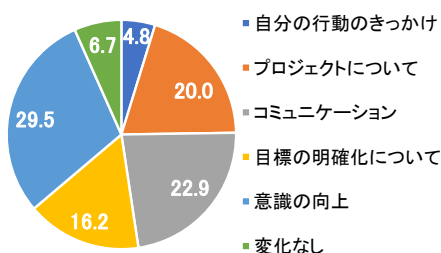


図1 「意識の変化」の具体的な傾向

出典：玉有 (2023) p. 67

表1はワークショップ全体の満足度を集計したものである。学年ごとに集計すると、90%以上が4.0以上の評価であり、当初の目的が達成したといえる。また、4年生は、「不満がある」が一人いたものの、ほとんどが4以上であり、満足度が高い傾向となった。1年生から3年生までは、満足度1の回答がなかった。その理由として、入学当初よりコロナ禍であり、大学内で対面での交流が少なかったため、満足度が高くなったことが原因と考えられる。

「ワークショップを通じて、プロジェクト活動に対する意識変化についてあったか」を尋ねたところ、表2の結果になった。8割以上が4以上と

回答しており、意識の変化にワークショップが影響していることがわかった。

意識の変化について、具体的な内容を知るために、その理由を自由記述で回答してもらった。この結果は、回答傾向を基に、筆者が6つに分類した(図1)。意識の向上に言及した記述をまとめた「意識の向上」の項目が29.5%と最も多く、コミュニケーションに関する記述をまとめた「コミュニケーション」の項目が次点の22.9%、プロジェクトに対する帰属意識や関わり方などの記述をまとめた「プロジェクトについて」の項目が20%と三番目に多かった。また、「目標の明確化」によって行動がはっきりした、などの記述をまとめた「目標の明確化」が16.2%であった。このことから、ワークショップを通して、自分の行動に関しての気づきを得たことや、お互いのコミュニケーションが十分に取れ、関係性が生まれたことで、主体性が生まれ、帰属意識が高まったこと、目標が明らかになったことなどが意識の向上に影響があったと考えられる。

5. まとめと今後の予定

コロナ禍による対面活動の制限により、停滞していた学生の学びを継続させるためのプロジェクト活動支援として、ワークショップによる関係性構築支援を行ってきた。その結果、コミュニケーションによる関係性やモチベーションの向上が見られるとともに、具体的なプロジェクト活動を活性化する動きにもつながった。

学生プロジェクトでは、より良い学生プロジェクト活動につなげるために、令和5年度以降も希望するプロジェクトに対して引き続き対話を用いた活動支援を続けている。

6. 参考文献

1) 玉有 朋子, 森口 茉莉亜, 有廣 悠乃, 北岡 和義, 寺田 賢治 (2023) 『コロナ禍の学生プロジェクトにおける参加者の関係性構築を目的としたコミュニケーション支援』, 日本教育工学会研究報告集, Vol. 2023, No. 1, 63-68, 2023年5月.